

中唐唱和文學の展開

—『劉白唱和集』への道—

橘 英 範

はじめに

白居易（七七二～八四六）と劉禹錫（七七二～八四二）の唱和詩集である『劉白唱和集』は、編纂當時の姿を大部分復原しうるものとして重要な価値を持つものであるが、この復原された『劉白唱和集』に收められる作品は、制作の状況に着目すると、おおよそ次の四種に分けられるようである。

- ① 唱和（一人の詩人が作った詩に對し、別の詩人がそれを讀んだ感興を詠じるもの）
- ② 贈答（一人の詩人が相手に詩を贈り、贈られた側がそれに答えた詩を作るもの）
- ③ 競作（一つの題材について、複数の詩人が同時に詩を作るもの）
- ④ 聯句（複数の詩人が共同で一首の詩を制作するもの）

この中で、特に①～③については、制作状況の詳細が不明なものもあり、また③の形式で作られ始めたのが、先にできあがった相手の詩

中唐唱和文學の展開

を見てから完成したため、結果的には①ともいえるものなどもあって、峻別できる譯ではないが、いわゆる「唱和」（①）の作のみでないことは、劉白がとらえる唱和文學が多様であったことを示していよう。

中唐期には詩の唱和的傾向が増大したとされるが、劉白が『劉白唱和集』に收められた作品を作った時期は大和・開成年間を中心としており、これに先立つ大曆期の浙東・浙西の文學集團における唱和詩や聯句の制作、元和初期の韓孟の聯句制作、元和年間から續いていた元白の唱和詩などの影響を當然受けていると考えられる。劉白の唱和詩や中唐の唱和文學に關する先行文獻は数多いが、管見の及ぶ限りでは、それらの關係を位置づけた研究はこれまでなかったようである。

本稿では、中唐期における唱和の文學の流れを追い、その流れの中で劉白の唱和文學がどのように位置づけられるのかという點について卑見を述べてみたい。

一、大曆期の詩人の場合

中唐期における唱和文學の流行の先驅けとなったのは、越州（浙江省紹興市）を舞臺とし、鮑防・嚴維を中心人物としたいわゆる浙東の

文學集團と、湖州（浙江省湖州市）を舞臺とし、顔眞卿・皎然を中心人物としたいわゆる浙西の文學集團である。聯句および贈答・唱和や競作の詩は、いずれも六朝期あるいはそれ以前から續くものであるが、これらの文人たちの盛んな創作活動によって、文人たちの詩作の中でより大きな位置を占めるようになったと思われる。

浙東・浙西の詩人たちの集團文學にはそれぞれ特徴があるが、後の詩人たちの集團文學から見るとおおむね似たものであるので、ここでは大曆期の詩人として一緒に扱うこととする。

浙東・浙西の詩人たちがなぜ集團の文學の創作を行うようになったかについては、さまざまな要因が考えられるが、本稿の目的からはずれることもあり、また先行の多くの研究成果があるので、そちらに譲ることとし、ここでは後の時代から見て、浙東・浙西の詩人たちの唱和文學の特徴と考えられることを二點指摘しておきたい。

その第一は、聯句の形式の方面で多様な工夫を行っていること、第二は同座することが重要な要素となっていることである。

まず第一の點について觸れておこう。浙東・浙西の文學集團は非常に多くの聯句を残している。浙東の嚴維・鮑防らが現在に伝える聯句は全部で十四首、浙西の皎然・顔眞卿らが伝える聯句は、皎然・顔眞卿の両者が参加しているもので二十二首、両者の加わった聯句の参加者が一人でも重なっているものを全て合わせれば、全八十五首に及ぶ。韓孟の聯句が、架空の聯句一首と孟郊の参加していない一首を含めても全十五首、劉白の聯句が、白居易の名前が記されない二首を加えても全十六首であるのに比べて、非常に多くの作品を残しているといえるよう。

その中で彼らは多様な形式の聯句を残している。先行研究でも指摘

されているように、六朝以来の五言の四句および二句交替と、七言毎句押韻の柏梁體の聯句とを中心としながら、七言の隔句押韻のものや浙東では「從一字至九字」の特殊な形式、浙西では三言・四言・六言・雜言といった形式のものなど、前の時代には見られなかったさまざまな形式の作品が工夫されている。

また柏梁體の作では、羣臣が皇帝とともに制作して皇帝を言祝ぐという本来の柏梁體の聯句の性質から外れて、次のような作が中心となる。

顔眞卿・李嶠・張薦「七言樂語聯句」〔全唐詩〕卷七八八

苦河既濟眞僧喜 苦河既に濟りて 眞僧喜ぶ (李嶠)

新知滿座笑相視 新知座に滿ちて 笑ひて相ひ視る (顔眞卿)

成客歸來見妻子 成客歸り來たりて 妻子を見る (皎然)

學生放假偷向市 學生放假して 偷かに市に向かふ (張薦)

これは聯句の題ともなっている「樂」しいことを並べ立てた聯句であり、齋藤茂氏が酒令的聯句とするものであるが、大曆期の柏梁體の聯句においては、このような作品が中心となっている。これは第二の點とも關わる特徴といえよう。

次に、同座することが重要な要素となっているという第二の點について述べておきたい。

柏梁體の聯句が酒令的要素を持っているということは、聯句が友人間での楽しい宴會を盛り上げる役割を果たしていたことを表しているよう。大曆期の詩人たちは、聯句のみならず、贈答・唱和や競作の詩も残している。贈答や唱和は必ずしも同座でなくてもよいジャンルであ

るが、大曆期の詩人の場合はそうではない。浙東の集團文學の場合、鮑防が浙東觀察從事であった廣徳元（大曆五年）（七六三〜七七〇）の間、浙西の文學集團の場合も、顔真卿が湖州刺史であった大曆八〜十二年（七七三〜七七七）の間に片寄っており、いずれも、詩人たちがある土地に集まっていた時期に集中して作られている。すなわち、彼らはさまざまな唱和文學を制作したが、それは同座を基本とするものであり、遠く離れて行うことによりあまり價值を見出ししていなかったのである。これは、彼らの集團文學が、酒宴に興を添え同座した友人たちとの友情を深めるようなものであったことを表している。

このような大曆期の詩人たちによる文學活動の影響を、續く時代の詩人たちは當然受けているはずであるが、大曆期の詩人たちが試みた全ての面を受け継いだわけではなく、一部のみを受け継いでいるようだ。すなわち、韓孟の場合は聯句の方を受け継ぎ、元白の場合は唱和の方を受け継いでいるのである。

二、韓孟の場合

集團文學として大曆期の作の次に挙げられるのが、貞元十三〜四年（七九七〜八）と元和元年（八〇六）に制作された、韓愈（七六八〜八二四）と孟郊（七五二〜八一四）による聯句である。本節では、韓孟の聯句について考察してみたいと思う。

韓愈と孟郊の集團文學を大曆期と比較すると、二つの特徴が挙げられよう。その第一は、聯句、特に五言の古體の聯句に特化していることであり、第二は、第一の特徴と表裏をなすものであるが、聯句以外の唱和や贈答・競作の詩の制作にあまり熱心でなかったということである。

まず第一の点についてであるが、韓愈が大曆期の文學の中から聯句を受け継ぎ、お互いの詩才を錬磨する場として、さまざまな独自の聯句を生み出し、ついには畫期的な「城南聯句」の跨句體を創始して、後の聯句に大きな影響を与えたことについては、多くの優れた先行研究があるので、そちらに譲ることとし、ここでは、聯句は同座を基本としているものであるから、韓孟にとって、彼らの集團文學には同座が重要な要素となっていることのみ指摘しておきたいと思う。

次に第二の点について述べてみたい。
『唐五代詩人行往詩索引』^⑤によって、韓愈と孟郊の兩者の關係を示す作品を全て挙げると、次のようになる。

韓愈↓孟郊

「長安交游者一首、贈孟郊」（卷二）

「孟生詩」（同前）

「答孟郊」（同前）

「醉留東野」（同前）

「將歸、贈孟東野房蜀客」（卷二）

「薦士」（卷五）

「孟東野失子」（卷六）

「江漢一首、答孟郊」（卷八）

孟郊↓韓愈

「獨愁（一作贈韓愈）」（卷二）^⑥

「遊城南韓氏莊」（卷四）

「嚴河南」（卷六）

「連州吟三章」（同前）

- 「贈韓郎中愈二首」(同前)
- 「汴州離亂後、憶韓愈李翱」(卷七)
- 「答韓愈李觀別、因獻張徐州」(同前)
- 「送韓愈從軍」(卷八)
- 「與韓愈李翱張籍話別」(同前)
- 「汴州別韓愈」(同前)

すなわち、詩題からすると集團の文學と認めがたい作品と贈答の作と考えられる作品が伝えられるのみであり、詩題に「和」「同」などが用いられた、いわゆる唱和の作は残されていない。そしてこれら韓愈と孟郊が互いに相手を意識して作った贈答などの詩は、二人が他の詩人を意識して作った詩と比較して、特に多いわけではないのである。もちろん韓愈も當時の唱和詩流行の流れと無縁だった譯ではない。再び『唐五代詩人行往詩索引』によっていくつか例を挙げれば、次のような作がある。

韓愈の唱和詩

- 「憶昨行、和張十一」(卷四)
- 「陸渾山火、和皇甫湜用其韻」(卷六)
- 「和真部盧四(汀)酬翰林錢七(徽)赤藤杖歌」(同前) など
- 孟郊の唱和詩
- 「和丁助教塞上吟」(卷二)
- 「和皇甫判官遊瑯琊溪」(卷四)
- 「和薛先輩送獨孤秀才上都赴嘉會、得青字」(卷八) など

いずれも詩題に「和」の文字を用いており、韓愈・孟郊も他の詩人との間での唱和の詩は残していることが分かる。韓愈の方は、「荊潭唱和詩序」・「韋侍講盛山十二詩序」(ともに卷四)などの唱和集の序文を残してもいる。

また、韓愈の「祭河南張員外文」(卷五)には次のようにいう。

我落陽山、以尹驪獐。(中略)南上湘水、屈氏所沈。二妃行迷、淚蹤染林。山哀浦思、鳥獸叫音。余唱君和、百篇在吟。

我は陽山に落ちて、以て驪獐に尹たり。(中略)南のかた湘水を上る、屈氏の沈む所。二妃行きて迷ひ、淚蹤 林を染む。山に哀しみ浦に思ひ、鳥獸 音を叫ぶ。余唱へ君和し、百篇 吟に在り。

貞元十九年(八〇三)、陽山の令に左遷される途上を描寫した部分であるが、ここには「私が詩を作れば君がそれに和し、百篇も吟詠した」と、左遷の道中で張署とともに詩の唱和を繰り返したことが記されている。⁽²⁰⁾

さらに、韓愈には先に挙げたように「陸渾山火、和皇甫湜用其韻(陸渾山火、皇甫湜に和し其の韻を用ふ)」の詩があり、皇甫湜の詩が現存しないようなのはっきりとは確かめられないが、詩題から和韻を行っていたことも分かるのである。

すなわち、唱和の流行した時代に生きた韓愈は、恐らく社交上での必要もあって、他の詩人との間では唱和詩の制作を行っていたのである。ところが、韓愈と孟郊との間の唱和の作は残されていない。これは単に韓愈と孟郊の間の唱和詩のみが偶然残されていないというのではなく、彼らが唱和詩制作に興味を示さなかった結果ではないだろう

か。韓愈と孟郊の二人にとっては、唱和よりも聯句の方が重要だったのである。

同座する必要がない唱和と比較した場合、同座を原則とする聯句の醍醐味は、相手と對峙してその眼前で詩句を連ねなければならぬという緊張感にあり、また、その緊張の中から新しい表現を生み出し得た喜びにあるといえよう。韓孟はそこに魅力を感じていたのではないだろうか。

そのことは、元和七年（八〇二）の韓愈の「石鼎聯句詩序」（卷四）からもうかがえる。

二子相顧慙駭、欲以多窮之、即又爲而傳之喜。喜思益苦、務欲壓道士。每營度欲出口吻、聲鳴益悲。操筆欲書、將下復止、竟亦不能奇也。畢、即傳道士、道士高踞大唱曰、劉把筆、吾詩云云。其不用意而功益奇、不可附說。語皆侵劉侯、喜益忘之。劉與侯皆已賦十餘韻、彌明應之如響、皆穎脫含譏諷。夜盡三更、二子思竭不能續。

二子相ひ顧みて慙ぢ駭おどろき、多きを以て之を窮めんことを欲し、即ち又た爲りて之を喜に傳ふ。喜思ひ益ます苦しみ、務めて道士を壓せんと欲す。營度して口吻より出ださんと欲する毎に、聲の鳴くこと益ます悲し。筆を操りて書かんと欲するも、將に下さんとして復た止め、竟に亦た奇なる能はざるなり。畢へて、即ち道士に傳へ、道士高踞大唱して曰く、劉把筆を把れ、吾が詩は云云、と。其れ意を用いずして功益ます奇、附説すべからず。語皆な劉侯を侵し、喜益ます之を忌む。劉と侯と皆な已に十餘韻を賦し、彌明之に應ずること響の如く、皆な穎脫にして譏諷を含む。夜三更を盡くし、二子思ひ竭きて續ぐ能はず。

この、軒轅彌明という架空の人物と、實際にいわゆる韓門の弟子であった劉師服・侯喜とが行ったという設定の聯句の序文には、聯句制作の状況が描かれているが、ここで注目されるのは、相手の句に對する參加者の反應であろう。

軒轅彌明と二人の詩人が攻撃し合うという設定であり、特に當てこすりやそれに對する反應については、韓孟の實際の聯句には當てはまらないだろうが、「喜思益苦、務欲壓道士」と思ひをめぐらして相手を壓倒しようとしたり、「竟亦不能奇也」と珍しい句ができぬことを悔やんだりする點は、恐らく韓孟の間でも實際にあったことであろう。「彌明應之如響」と、すぐに句をつなげることが稱贊の口吻で記されるのなども、韓孟の間でもただちに句を生み出す才能が重視されていたことを思わせる。こういった緊張感のみなざる丁々發止のやりとりは、同座せず時間をかけて制作しうる唱和詩においては、味わうことのできないものだったのである。

また、この「石鼎聯句詩序」は、初期の韓孟聯句には他の詩人が加わっていたのに、後には韓孟の二人だけになった理由をも示唆している。「石鼎聯句」は五言二句交替の聯句だが、劉師服と侯喜が降參することによって、軒轅彌明が八句を連ねて終わっている。「欲以多窮之」と意氣込んだものの、劉師服と侯喜はついていけず、逆に相手にたりこめられたのである。

韓孟の初期の聯句には、他の詩人が參加するものがあるが、大曆期や劉白の聯句のように參加者が平等に擔當するのではなく、最終的には他の參加者は脱落し、韓孟の二人のみが擔當して終わっている。そしてその後の聯句では、他の詩人を交えることなく、二人で制作する

ようになる。すなわち、韓孟にとって、他の詩人の存在は邪魔だったといつても過言ではあるまい。齋藤茂氏が指摘するように、韓孟の聯句は、他の詩人を交えた試みを経て、一定の句數で交替し順序を守るという形式上の制約が詩想を妨げることを知り、二人だけで聯句の可能性を追求するようになったのである。

韓愈と孟郊は、大曆の詩人たちの残したさまざまな集團の文學のジャンルから、聯句というジャンルを選択し、繼承した。そして、自分たちなりに聯句というジャンルの可能性を追求した結果、「城南聯句」の跨句體という獨創的な形式に到達し、そしてそれが後の時代の聯句に大きな影響を與えたのであるといえよう。

三、元白の場合

韓孟の聯句制作よりやや遅れて、元稹（七七九〜八三一）と白居易の唱和は元和五年（八一〇）頃から本格化し、最終的に『元白唱和因繼集』十七卷となる。次にこの元白の集團文學について考えてみたいと思う。

元白の集團文學の特徴としては、次の二つが挙げられよう。まず第一は、韓孟とは逆に、聯句を作った形跡がなく、唱和が中心になっていることであり、第二は、相手の大量の詩に對して、まとめてじっくりと唱和する傾向があるということである。

まず第一の點について觸れたい。

元稹と白居易は多くの唱和や贈答の詩を残しているが、聯句を作った形跡は残されていない。聯句以外の作品においては、白の「八月十五日夜、禁中獨直、對月憶元九」0724や「舟中讀元九詩」0888など、贈答の詩で有名なものがあるが、後述するように、彼らの集團の文學

の中心となるのは、いわゆる「唱和」の詩ということが出来る。韓孟の聯句はしばしば劉白の聯句と對比され、もちろん聯句というジャンルの中で考える場合、両者は色々な點で對照的なのだが、唱和文學全體で見れば、實は韓孟の聯句と元白の唱和は、さらに鮮やかな對比を爲しているといえよう。

元白は大曆期の詩人の活動のうち、特に唱和の詩を受け継いだといえるが、韓孟が單に大曆期と同じような聯句を作ったのではなくて自分たちの聯句を工夫したように、元白も唱和の詩全てに價値を認めていたわけではない。

有名な白居易の「與元九書」1188に、次のようにいう。

如今年春遊城南時、與足下馬上相戲、因各誦新艷小律、不雜他篇。自皇子陂歸昭國里、迭吟遞唱、不絕聲者二十里餘。樊季在傍、無所措口。

今年の春 城南に遊びし時の如きは、足下と馬上に相ひ戯れ、因りて各おの新艷の小律を誦し、他篇を雜へず。皇子陂より昭國里に歸るまで、迭ひに吟じ遞ひに唱へ、聲を絶やさざる者二十里餘り。樊季 傍に在るも、口を措く所無し。

ここには、元和十年（八一五）の春、彼らが城南に遊んだ歸り道に、他の友人を無視してずっと詩の唱和をして楽しんだことが記されているが、この時に作られた詩で現在に傳えられるものは、白の七絶「遊城南留元九季二十晚歸」0815ただ一首のようである。作品の保存に努めた白居易であるから、この時の作が偶然全て散佚したとは考えにくい。すなわち、彼らにとって、歸り道の無聊を慰めるために作られた

ような作品は、残すべきものと考えられていなかったのではないだろうか。この點、陽山の令左遷時の作品を傳えない韓愈とよく似ているといえよう。

それでは彼らが傳えようとしたものはどのようなものだったのであるうか。これが、相手の大量の詩に對して、まとめて唱和する傾向があるという第二の點に關わってくる。元白の唱和の場合、宴席などで相手の詩にすぐに唱和するものでなく、後になってまとめて唱和するのが中心になるといふ特徴があるのである。

元和五年（八一〇）の「和答詩」十首の連作の序文1000を見てみよう。

及足下到江陵、寄在路所爲詩十七章、凡五六千言。（中略）僕既羨足下詩、又憐足下心、盡欲引狂簡而和之。屬直宿拘牽、居無暇日、故不即時如意。旬月來、多乞病假。假中稍閑、且摘卷中尤者、繼成十章、亦不下三千言。

足下の江陵に至るに及び、路に在りて爲る所の詩十七章を寄す、凡そ五六千言。（中略）僕 既に足下の詩を羨み、又足下の心を憐れみ、盡く狂簡を引ききて之に和せんと欲す。屬 直宿に拘牽せられ、居るに暇日無く、故に即時に意の如くせず。旬月來、多く病假を乞ふ。假中 稍閑あり、且く卷中の尤なる者を摘り、繼ぎて十章を成し、亦た三千言を下らず。

ここには、江陵の元稹から十七首の詩が送られ、唱和しようと思つたが、しばらくは仕事が忙しくて唱和できず、ここ一月ほど病氣休暇をもらったので、その休暇を利用して唱和したと述べられている。江陵

と長安で離れているから、同座できないのは當然であるが、すぐに唱和するのではなく、休暇の時にじっくり腰を据えて唱和しているのである。

この時の唱和の對象となつた作は、元稹の集の冒頭に收められているが、「路所爲詩」という通り、いずれも元稹が江陵左遷途上の感慨を詠じた諸作であり、白居易に贈られたものとは認められない。白はその十七首の中から十首を選んで唱和したのであり、このような唱和の方法が彼らの集團文學の中心だったのである。

元白の場合、白の「白氏集後記」853によつて、最終的にその唱和集は『元白唱和因繼集』十七卷と名付けられたことが分かつており、初期の「唱和」の時代から大和初年には「因繼」という時代へと變化していくのだが、この大量の詩にまとめて唱和するという傾向は變わることなく、むしろ強まっている。この「唱和」と「因繼」の違いについては別に論じたことがあるので詳しくは述べないが、その經過を簡単に記せば次のようになるう。

○大和元年（八二七）、元が白の作品の中から詩五十七首に追和、「因繼集」卷一とする

○大和二年（八二八）、白が送つた近作五十首に元が次韻、卷二とする

○同年、再び白が送つた新作五十首に元が和したものが恐らく卷三となる

○大和三年（八二九）、元に送られた四十二首の詩に白が次韻したものが卷四となる

この簡単な経過からも明らかのように、後期の「因繼」の場合、相手から送られた作品羣に片端から次韻して行くという性格を備えていたと思われ、同じ唱和の詩でも、大曆期の詩人たちによる宴席での當意即妙の唱和とは大きく異なる側面を見せている。

そもそも贈答・唱和や競作の詩は、必ずしも同座を原則とはしないものであるが、元白の場合は同座である必要がない、というより、同座でない方が都合がよかったのではないだろうか。同座でないから詩作に費やせる時間は無制限となる。相手から送られた原唱とじっくり対峙し、そこからいかなる和篇を作り出すか、その點が元白にとって重要だったのであろう。元白の場合は、對峙することによって生じる緊張感を新しい表現を生み出すひらめきに變える聯句よりも、他者の作品に向かい合うことから生まれる感動と違和感をじっくりと自分の作品に結晶させて行く唱和詩の方に、集團の文學としての魅力を感じたといえよう。

そのことは、元稹の元和十五年（八一〇）の「上令狐相公詩啓」⁰⁹⁸¹からもうかがえる。

居易雅能爲詩、就中愛驅駕文字。窮極聲韻、或爲千言、或爲五百言律詩、以相投寄。小生自審不能以過之、往往戲排舊韻、別創新詞、名爲次韻相酬。蓋欲以難相挑耳。

居易雅に能く詩を爲り、就中 文字を驅駕するを愛す。聲韻を窮極し、或ひは千言を爲り、或ひは五百言の律詩を爲り、以て相ひ投寄す。小生 自ら以て之を過ぐる有る能はざるを審かにし、往往にして戯れに舊韻を排し、別に新詞を創り、名づけて次韻の相酬と爲す。蓋し難きを以て相ひ挑まんと思ふのみ。

優れた詩才を駆使して長大な作品を紡ぎ出して送ってくる白居易に對し、それを超えられないと思つた元稹は、困難の克服という方法で應じようと、同じ韻を用いながら新たな創作となっている詩を作つて、「次韻相酬」と呼んだという。もとの詩の韻をそのまま用いるという制限を設けながら、それを克服して新たな創作を完成させることが目的となつており、そうする中で、彼らは次韻詩という唱和の方法を確立したのである。すなわち制作の過程よりも作品の完成度が重要視されているといえるだろう。一方、韓孟の聯句制作は、句の完成度もちろんのことだが、相手の提示した句に對してただちに答えることが要求されるものであり、制作の過程にこそ醍醐味があるものであった。

元白の目指していたものとは大きく異なっていたのである。元白の唱和がこのようなものになつたのには、お互いの地方勤務により、同座したくてもできなかったという事情もあったと思われるが、元白はそれを逆手にとつてこのような唱和を追求したのではないだろう。元白は、大曆期の集團文學のうち唱和を受け継ぎつつ、唱和の工夫の中から次韻詩という方式を定着させ、宋代以後の大流行の下地を作つたのである。

四、劉白の場合

最後に、最も遅れて寶曆年間（八二五〜八二七）から本格化し、會昌二年（八四二）の劉禹錫の死に至るまで續けられ、最終的に『劉白唱和集』五卷となつた劉白の集團文學の場合を考えてみたいと思ふ。

約十五年にわたつた劉白の集團文學にも細かく見るとさまざま変化があるが、全體として他の文學集團と比較した場合、次の二つの特

徴が擧げられよう。まず第一に、唱和・贈答・競作・聯句というさまざまなジャンルで制作していることであり、第二に、さまざまな状況下で唱和していることである。

まず第一の點について述べたい。

劉白の場合、明らかに競作の詩というの数は少ないが、韓孟は聯句、元白は唱和というはつきりした中心があったのに對し、彼らは聯句も贈答・唱和の詩も相當數作っており、さまざまなジャンルを工夫している。その點で、最も似ているのは大曆期の集團の文學といえるだろう。

韓孟や元白よりも大曆期の集團文學に似た點は他にもあり、例えば聯句において、韓孟の跨句體の聯句を経ながらも、大曆以前から主流であった、五言二句交替・四句交替の聯句を作り續けていることが擧げられよう。また、韓孟の聯句が表現を鍊磨することに重きを置くものであったのに對し、劉白の聯句は宴席での趣向や友情の表現に重きを置くものであった。これらのことについては、多くの先行研究に指摘されている。³⁰ こういった點も、韓孟よりは大曆期およびそれ以前の聯句に近いものといえよう。

一方、唱和や贈答等の作においても、元白が次韻という唱和の形式を確立したにも関わらず、劉白は次韻等の和韻にあまり興味を示しておらず、特に元稹の死後には和韻詩の制作が急速に減少している。³¹ これも、文學史的に見れば、元和期における次韻詩の流行以前の状態に戻ったものといえるかもしれない。

このように見ると、元和の時期に、韓孟と元白がそれぞれに工夫したものが受け継がれることなく、大曆期に逆戻りしているようにも見えるが、決してそうではない。大曆期の集團の文學の影響を受けなが

らも、劉白なりに、自分たちの文學を模索したのである。

例えば、白居易の「劉白唱和集解」290にいう。

至大和三年春、以前紙墨所存者、凡一百三十八首。其餘乘興扶醉、率然口號者、不在此數。

大和三年の春に至り、以前の紙墨の存する所の者、凡そ一百三十八首。其餘の興に乗じ酔ひを扶け、率然として口號せし者は、此の數に在らず。

『劉白唱和集』に收められた全百三十八首の詩の中には、興に乗じ酒宴を盛り上げるための即興の詩は含んでいないといっており、すなわち、韓孟や元白と同じく、劉白も一時的な遊興の作は唱和集に採録するに値しないものと考えていたのである。³²

その點が特徴の第二に繋がっていく。一時的な遊興の作ではなく、どういふ作品を唱和集に收めたのか。復原された『劉白唱和集』を見ると、さまざまな状況下での作品が收められており、特に傾向がないようにも見えるが、實はこのさまざまな状況下の作品こそが、彼らが残したかったものではないだろうか。

劉白の場合、唱和が本格化するのと同じ年の両者が五十代も半ばになってからのことであるが、ともに長生きしたこともあり、十五年以上にわたってさまざまな状況下での唱和を行っている。この點は同座を原則とする大曆期の詩人と大きく異なる點であり、鮑防と嚴維、顏真卿と皎然は、地方勤務が終わって彼らが離ればなれになった後は、關係する作品をほとんど残していない。劉白のみならず、韓孟・元白が、生涯にわたって變わらぬ友情を示す作品を残しているのとは、際

立った違いを見せている。

長年にわたる劉白の唱和詩には、宴席で主人を言祝ぐ社交辭令的な作もあれば、二人だけで友情を語り合う作もあり、地方勤務で離れていて同座できない時期の作もあれば、洛陽で同座しての作もある。一人の時、二人の時、大勢の時、あるいは送別の場、行樂の場、くつろぎの場など、さまざまな場面で作品が作られている。

ただ、それぞれは以前から作られているものであり、例えば宴席で貴人に陪する作は、魏の公宴詩以来の長い傳統を持つものである。遠くへ赴任する友との送別留別の作やその任地にいる友を思い合う作なども同様であろう。その中で、劉白の新しい特徴を示すのは、非常に日常的な作品ではないだろうか。大曆期の唱和文學が、文人の同座という貴重な機會を背景として生まれたハレの唱和文學であったとすれば、劉白は、ハレの作のみならず、ケの唱和文學をも制作したのである。

一つの例を挙げてみよう。開成二年（八三七）、洛陽における劉白の唱和詩である。

白居易「小臺晚坐憶夢得」3046

汲泉灑小臺	泉を汲みて	小臺に灑 <small>ま</small> げば
臺上無纖埃	臺上に	纖埃無し
解帶面西坐	帶を解いて	西に面して坐せば
輕襟隨風開	輕襟	風に隨ひて開く
晚涼閒興動	晚涼	閒興動き
憶同傾一杯	同 <small>ども</small> に一杯を傾けんことを憶ふ	
月明候柴戸	月明らかにして	柴戸 <small>うか</small> を候 <small>か</small> ふ

藜杖何時來 藜杖 何れの時にか來たる

劉禹錫「酬樂天小臺晚坐見憶」0810

小臺堪遠望	小臺	遠望に堪へ
獨上清秋時	獨り上る	清秋の時
有酒無人勸	酒有るも	人の勸むる無く
看山祇自知	山を看るも	祇だ自ら知るのみ
幽禽囀新竹	幽禽	新竹に囀り
孤蓮落靜池	孤蓮	靜池に落つ
高門勿遽掩	高門	遽 <small>には</small> かに掩 <small>おほ</small> ふ勿れ
好客無前期	好客	前期無し

白の詩は、秋の涼しい夕暮れに小臺で寛いでいる時、ふと劉禹錫を思い出して來訪を促すというものであり、劉の詩は、小臺での白の様子を想像した後、よい客は前觸れなく現れるので、すぐには門を閉めないうで下さいと結んでいる。つまり、涼しくていい夜ですからいらっしゃいといわれて、ではゆっくり行きますのでお待ち下さいというやりとりになっているのである。

この唱和詩が宴席での一時的な遊興の作と一線を畫している點があるとすれば、それは、友を誘い、行きますと答えるという日常的なやりとり、それを詩によって行っており、そしてそれが文人の付き合いの中で詩の一例として、普遍性を持っているという點ではないだろうか。

中唐の時期の詩、特に白居易の詩に日常的な題材が詠じられるようになったことについては、多くの先行研究があるが、劉白38の集團文學

は、唱和の形でそれが行いうることを示したものと見えよう。彼らの唱和文學は、極めて日常的な生活の一こまをも詩として表現しうること、そして詩によってそれの的確に答えたり唱和したりしうること、そういった可能性を提示したものであり、同時同座であるとか相手は長く待ってくれるとかいった特別な條件を超えて、日常的なものを含むさまざまな文人の交遊の場に適した詩を作ることにより、唱和文學の持つ幅を大きく廣げたものだったのである。

それでは、なぜ劉白はこのような唱和文學を作ったのであろうか。

同じ白居易が關係していながら、劉白の唱和文學が元白のそれともむきが異なっていることを考え合わせれば、その理由の一つは、齋藤茂氏がいう、白居易が元稹に求めたものと劉禹錫に求めたものが異なっていたという点にあるだろう。元白唱和詩が、相手の作った詩にどんな次韻して行くようなものであったことからすると、相手とは直接關係のない作品にも全て和することになる。白居易にとって元稹は、お互いが作った詩作の全てを共有し合い、それによって啓發し合うような閒柄だったといえるだろう。若い頃から苦樂を共にした元稹は、深く相手を理解し、切磋琢磨し合う知己だったのである。

それに對し、劉白の唱和文學の場合は、日常のさまざまな場で詩作を共にしているが、それはやはり交際におけるさまざまな場の中であり、相手と關連した作品が中心となっている。白居易にとって劉禹錫は、氣の置けない詩友といった閒柄であり、五十代半ばで知り合った、老いを楽しく過ごす上での馬の合う仲間だったのであろう。

また、これと關連して、劉白が日常的な場を含むさまざまな場における唱和文學を残した理由の第二としては、白居易の詩風の變化が擧げられるだろう。

白居易がその後半生において、日常的な樂しみを詠ずる方向へと變化したことについても多くの先行文獻があるが、劉禹錫はその後半生に知り合った友人であり、そのことが彼らの文學にも影響して、彼らの交際の中での日常的なさまざまな場において、唱和詩を作るようになったのであろう。これに對して元稹は、若い頃から心を許し合い、全てを知り盡くした親友であった。そのため、相手の全ての作品にじっくりと向き合い、その詩作を追體驗しながら、唱和を重ねていったのであろう。

元白が晩年にも洛陽で過ごしていたら、お互いの詩を全て共有し合った元白の詩も、あるいは劉白のような側面を持つにいたったかもしれないが、元稹が長く地方にいて任地で亡くなったために、時間をかけて相手の全ての詩に唱和するという形式のまま終わつたのではないだろうか。

終わりに

以上、『劉白唱和集』へと至る中唐唱和文學の展開について卑見を述べた。大曆期における集團文學の成果の中から、韓孟は聯句、元白は唱和を中心に受け継ぎ、跨句體の聯句や次韻詩を確立して、後の世に大きな影響を與えた。劉白はそれを承けて、日常的な場をも含めたさまざまな場における唱和を作ることに、唱和文學のバリエーションを豊かにしたといえる。

劉白の唱和文學は、韓孟の跨句體や元白の次韻詩というような、目に見える形で後世に大きな影響を與えてはいないが、文人同士の長年にわたる交遊の中で訪れるさまざまな場において、どのような詩を作りまたそれに應じればよいかという實例として、後の時代に大きな影響

を與えているのではないだろうか。

中唐全體の唱和詩の流れを對象としたため、深いところまで踏み込んだ考察ができなかったが、中唐における唱和文學の展開について、おおよその見通しは示し得たのではないかと思う。ただ、菲才ゆえの多くの誤解や不備があることと思う。諸賢のご批正・ご教示を仰ぐことができれば幸甚である。

注

(1) 『劉白唱和集』はすでに散佚しているが、紹興本『劉賓客文集』外集に付される宋敏求の後序によって、宋敏求が外集を編纂する時に『劉白唱和集』を資料の一つとして用いたことが分かり、外集に收められた『劉白唱和集』に由來する劉詩のほとんどに對して、對應する白詩が組み合わされていることから、ほぼ全容が分かるものとなっている。柴格朗『劉白唱和集(全)』(勉誠出版、二〇〇四年)第二章『劉白唱和集』の復原」に詳しい(以下、注においては原則として敬稱は省略させていただく)。

(2) 『劉賓客文集』外集に收められていて『劉白唱和集』に収録されていないことが明らかな作品から、それぞれの例を示せば、①の唱和には白「鸚鵡」2504—劉「和樂天鸚鵡」0609等があり、②の贈答には白「醉贈劉二十八使君」2522—劉「酬樂天揚州初逢席上見贈」0605等があり、③の競作には白「開成二年三月三日、河南尹李待價、以人和歲稔、將禳洛濱」(以下略)「3312—劉「三月三日與樂天及河南李尹奉陪裴令公、泛洛禳飲、各賦十二韻」0788等があり、④の聯句には「杏園聯句」白3728・劉3704等がある。なお、白詩のテキストには那波本、劉詩のテキストには四部叢刊本を用い、白詩には花房英樹『白氏文集の批判的研究』(彙文堂書店、一九六〇年)による作品番號を付し、劉詩には同『劉禹錫作

品資料表』(京都府立大學中國文學研究室、一九五八年)による作品番號を付す(以下同じ)。

(3) 白の「和思黯居守獨吟偶醉見示六韻、時夢得和篇先成、頗爲麗絕、因添兩韻、繼而美之(思黯居守の獨吟偶醉、六韻を示さるるに和す、時に夢得の和篇先づ成り、頗る麗絶と爲す、因りて兩韻を添へ、繼ぎて之を美す)」3538はその例である。

(4) 例えば目加田誠『唐代詩史』(目加田誠著作集)第六卷、龍溪書舎、一九八一年)では、中唐詩の特徴として「聯句の流行—詩の唱和的傾向」という項目を立てている。

(5) 中唐の唱和文學に關する主な先行文獻を挙げれば、以下のようなものがある。

○全般的なもの

花房英樹『白氏文集の批判的研究』(前出)

同『白居易研究』(世界思想社、一九七一年)

同・前川幸雄『元稹研究』(彙文堂書店、一九七七年)

蔣寅『大曆詩人研究』(中華書局、一九九五年)

賈晉華『唐代集會總集與詩人羣研究』(北京大學出版社、二〇〇一年)

柴格朗『劉白唱和集(全)』(前出)

○唱和に關するもの

姚垚『唐代唱和詩的源流和發展』(『書目季刊』第十五卷第一期、一九八〇年)

前川幸雄『劉白唱和詩の脚韻の研究』(『福井工業高專研究紀要』人文・

社會科學一六、一九八〇年)

鞏本棟『論唱和詩詞的淵源・發展及特點』(『中國詩學』第一輯、一九九一年)

拙稿『劉白唱和詩研究序說』(『廣島大學文學部紀要』第五十五卷特輯

號三、一九九五年)

同「唱和から因繼へ―元白唱和詩の變化」(『古田教授頌壽記念中國學論集』汲古書院、一九九七年)

齋藤茂「白居易と劉禹錫」(勉誠出版『白居易研究講座 第二卷 白居易の文學と人生Ⅱ』勉誠社、一九九三年)

○聯句に関するもの

埋田重夫「白居易と韓愈の聯句詩について―聯句形成史におけるその位置をめぐって―」(『中國詩文論叢』第二集、一九八三年)

赤井益久「大曆期の聯句と詩會」(『漢文學會々報』第二十九輯、一九八四年)

同「中國における寄り合いの文學」(『アジア遊學』第九十五號、二〇〇七年)

畑村學「韓孟の『城南聯句』―その競作意識と詩才鍊磨―」(『中國中世文學研究』第二十六號、一九九四年)

同「元和初年の韓愈―孟郊との聯句制作を中心に―」(『藤原尚教授廣島大學定年祝賀記念中國學論集』溪水社、一九九七年)

拙稿「劉白の聯句について」(『中國中世文學研究』第三十一號、一九九七年)

同「白居易と劉禹錫の聯句」(『アジア遊學』第九十五號、二〇〇七年)

川合康三「韓愈・孟郊『城南聯句』初探」(『中國文學報』第六十一冊、二〇〇〇年)

同「中國の聯句」(『京都大學藏實隆自筆 和漢聯句譯注』臨川書店、二〇〇六年)

同「和漢聯句の世界」(『松學舎大學人文論叢』第七十七輯、二〇〇六年)

同「ひとりで作った聯句―韓愈『石鼎聯句詩』をめぐって―」(『アジア遊學』第九十五號、二〇〇七年)

齋藤茂「孟郊『石涼十首』について―聯句から連作詩へ―」(『文藝論

叢』第四十二號、一九九四年)

同「韓孟聯句の新しき―征蜀聯句』を中心に―」(『中國學志』觀號、二〇〇五年)

同「韓孟聯句について―短編の作品を中心に―」(『松浦友久先生追悼中國古典文學論集』研文出版、二〇〇六年)

同「韓孟聯句の魅力」(『アジア遊學』第九十五號、二〇〇七年)

和田英信「聯句から次韻へ―中國における『座』の文學」(『アジア遊學』第九十五號、二〇〇七年)

(6) 注(5) 前掲花房英樹「白居易研究」および蔣寅氏・賈晉華氏・赤井益久氏の論考に詳しい。

(7) 唐以前の唱和文學に関する主な先行文獻には、以下のようなものがある。

鈴木虎雄「柏梁臺の聯句」(『藝文』二一、一九二一年、後『支那文學研究』に收める。弘文堂、一九二五年)

青木正兒「聯句淺説」(『山口大學文學會志』第一卷創刊號、一九五〇年、後『琴葉書畫』に收める。春秋社、一九五八年)

森野繁夫「六朝詩の研究」(第一學習社、一九七六年)

向島成美「六朝聯句詩考」(『漢文教室』第四百一十一號、一九八二年)

趙以武「唱和詩研究」(甘肅文化出版社、一九九七年)

(8) 注(6) 参照。

(9) 軒轅彌明という人物に假託された「石鼎聯句詩」(卷八) および李正封と韓愈の二人で行った「晚秋鄜城夜會聯句」(卷一〇)。なお、韓愈の詩のテキストには錢仲聯「韓昌黎詩繫年集釋」(上海古籍出版社、一九八四年)を用い、その卷数を記すこととする。

(10) 「春池泛舟聯句」劉703および「西池送白二十二東歸兼寄令狐相公聯句」劉706の二首であるが、いずれも「劉賓客文集」外集にあることから「劉白唱和集」に收められていたはずの作であり、白居易も何らかの

關わりがあったと思われる。

- (11) 注(5) 前掲赤井益久氏の諸論考に詳しい。
- (12) 柏梁體の聯句については、注(7) 前掲鈴木虎雄氏の論考に詳しい。
- (13) 注(5) 前掲齋藤茂氏の聯句に關する諸論考参照。
- (14) 浙東および浙西の唱和文學が作られた時期については、注(5) 前掲賈晉華氏の論考に詳しい。
- (15) 注(5) 前掲畑村學氏・川合康三氏・齋藤茂氏の聯句に關する諸論考参照。
- (16) 吳汝煜主編、上海古籍出版社、一九九三年。
- (17) 以下、孟郊の詩のテキストには華忱之・喻學才『孟郊詩集校注』(人民文學出版社)を用い、その卷數を記すこととする。
- (18) 注(16) 前掲書によれば、韓愈が最も多く贈答や唱和等の關連する詩を残しているのは張籍(十八首)であり、他に裴度十二首・張署十一首と、孟郊(十首)より多い詩人が二人もいる。孟郊の場合、ここに掲げた韓愈との關連の詩が十首(連作を分けると十三首)で最も多いが、陸長源の九首・孟簡の八首(聯句を除く)といった數と比較して突出している譯ではない。
- (19) 以下、韓愈の文章のテキストには馬其昶校注・馬茂元整理『韓昌黎文集校注』(上海古籍出版社、一九八六年)を用い、その卷數を記すこととする。
- (20) ただ、この時の唱和詩は残されておらず、後に見る元白の狀況とよく似ている。
- (21) 川合氏も注(5) 前掲「ひとりで作った聯句―韓愈『石鼎聯句詩』をめぐって」において指摘するように、「石鼎聯句」は虚構の聯句ではあるが、當時の聯句制作の狀況をうかがいうる資料となっている。
- (22) 注(5) 前掲「韓孟聯句について―短編の作品を中心に―」参照。
- (23) 元白の唱和詩の復原については、注(5) 前掲花房氏の二大著および

花房・前川氏の『元稹研究』に詳しい。

- (24) これらの作品が残されなかったのは、思いつまま即興で詠じたために後に忘れられてしまったり、推敲を經ていないため完成度が低いと見なされたりしたことに加えて、「新艷」と表現されているように、艷體の作だったためでもあろう。例えば、白居易が舊友と再會して妓女との遊びを追憶した「江南喜逢蕭九徹、因話長安舊遊、戲贈五十韻」³⁸⁸の詩も、妓女との同衾の様子まで詠じた極めて艷麗な部分があり、『白氏文集』には收められず、『才調集』のみによって傳えられている。こういった作品は、當事者同士の間でしか分らないような部分をも含んだ、非常に私的な作であり、普遍性を持たないと見なされたのではないだろうか。なお、白の³⁸⁸の詩については、齋藤茂氏「白居易『話長安舊遊戲贈』詩について―風俗資料としての側面から―」(『中國詩文論叢』第五集、一九八六年)に詳しい。
- (25) 白居易はこの十首の和篇を總稱して「和答詩」と呼んでいるが、これはこの序文に「其の間の見所、同じき者は固より自ら異にする能はず、異なる者は亦た強ひて同じうする能はず。同じき者は之を和と謂ひ、異なる者は之を答と謂ふ(其間所見、同者固不能自異、異者亦不能強同。同者謂之和、異者謂之答)」と述べているように、意見が同じものを「和」と呼び、意見が異なるものを「答」と呼んだものである。これは、この連作の和篇に限った命名のようであり、形式としてはいわゆる唱和であって、「答」といっても贈答の作だった譯ではない。
- (26) 注(5) 前掲拙稿「唱和から因繼へ―元白唱和詩の變化」。
- (27) 元稹の作のテキストには、『元稹集』(中華書局、一九八二年)を用い、注(5) 前掲花房・前川『元稹研究』による作品番號を記す。
- (28) 劉の死までの約十五年にわたって續けられた『劉白唱和集』が全五卷であるのに對し、貞元十八年(八〇二)頃から元稹の死の大和五年(八三二)に至る約三十年間の『元白唱和因繼集』が、三倍以上の全十七卷

となっていることも、單に元白の作に百韻・五十韻といった長篇が含まれているためばかりではなく、元白の唱和に相手の大量の詩に一度に和する傾向があったためであることを表している。

(29) 劉白唱和詩の變化については、注(5)前掲拙稿「唱和から因繼へ―元白唱和詩の變化」および「劉白の聯句について」で觸れた。

(30) 注(5)前掲埋田重夫氏論考および拙稿「劉白の聯句について」参照。

(31) この點については注(5)前掲拙稿「唱和から因繼へ―元白唱和詩の變化」で觸れた。

(32) これら「乘興扶醉、率然口號」の作の中には、やはり劉白の間でしか分らないような私的で個別的な作品が含まれていて、普遍的な價値を持つものではないと見なされたのであろう。

(33) 白居易の詩の日常性に關する主な先行文献には次のようなものがある。

川合康三「ことばの過剩―唐代文學の中の白居易―」(『白居易研究講座第二卷・白居易の文學と人生Ⅱ』勉誠社、一九九三年)

澤崎久和「白居易の日常生活」(『白居易研究講座第一卷・白居易の文學と人生Ⅰ』勉誠社、一九九三年)

下定雅弘『白樂天の愉悅―生きる叡智の輝き』(勉誠出版、二〇〇六年)

また、劉白唱和詩の日常性については、拙稿「『劉白唱和集』の受容について」(『藤原尚教授廣島大學定年祝賀記念中國學論集』所收、一九九七年)においても、別の角度から考察してみた。

(34) 注(5)前掲齋藤茂氏「白居易と劉禹錫」参照。

(35) この點に關しては多くの先行文献があるが、特に注(33)前掲下定雅弘氏の著書に詳しい。